

スタソーマの概要:スタソーマの主要登場人物の紹介とあらすじ

スタソーマ Sutasoma. 別名「プルシャーダ・シャーンタ」(調伏された人喰い). マジャパヒト朝の宮廷詩人タントゥラル(Tantular)作のカカウイン. 148 詩篇. 1365-89 年頃に成立.

- ・物語の時間/物語の空間/間テキスト性/コンテキスト性(青山 1995, 1997b)
- ・スタソーマ・ジャータカ(パリー語ジャータカ第 537 話)(青山 1986)
- ・バリ島クルンクン旧王宮のバラ・カンバン天井画(青山 1997a)

## 1. 登場人物

マハーケートウ Mahāketu	ハスティナに都するクル族の王. スタソーマの父.
スタソーマ Sutasoma	ハスティナの王子. マハーケートウの息子.
ケーシャワ Keśawa	聖者.
スミトラ Sumitra	聖者. スタソーマの母の伯父.
ダシャバーフ Daśabhāhu	スタソーマの母方のイトコ. カーシー国の王. チャンドラワティーの兄. ブラフマー神の恩寵の子.
チャンドラワティー Candrawatī	スタソーマの母方のイトコ. ダシャバーフの妹.
アルダナ Ardhana	スタソーマとチャンドラワティーの息子.
プルシャーダ Puruśāda	「人喰い」. 本名ジャヤーンタカ. ラトナカンダ国の王.
ガジャワクトラ Gajawaktra	「象頭」. 象の化け物. ガネーシャ.
ティロータマー Tilottamā	天女.
ワイローチャナ Wairocana	密教の教主としてのブツダ. 毘盧遮那仏. 大日如来.
ローチャナー Locanā	ワイローチャナの明妃.
デーワントカ Dewantaka	アワング国の王. プルシャーダの同盟者. コーシャの兄.
コーシャ Kośa	マガダ国の王. プルシャーダの同盟者. デーワントカの弟.
インドラ Indra	神. 帝釈天.
ブラフマー Brahmā	神. 梵天. 宇宙の創造を司る.
シワ Śiwa	神. シヴァ. 宇宙の破壊を司る.
ウイシュヌ Wiṣṇu	神. ヴィシュヌ. 宇宙の維持を司る.
ルドラ Rudra	神. シワ神の別名.
カーラ Kāla	神. インドでは「時間」の意で死の神ヤマ(閻魔)の別名. ジャワでは死と破壊をもたらす鬼神. 現代ジャワ語コロ(Kala)

## 2. あらすじ

- 1) 【スタソーマの誕生】カリの時代, ハスティナに都するクル族の末裔マハーケートウ王は, 悪鬼らの跳梁に悩まされていた. 悪鬼退治の希望を未来の王子に託した王の祈りに応じて, ワイローチャナ(Wairocana, 毘盧舍那, 大日如来)自身が王子として誕生(転生)し, スタソーマと名付けられる.
- 2) 【スタソーマの出家】王子は, 人々の期待に反して, 悟りを求めて秘かに王宮を抜け出し, 修行の旅に出る. 墓地で瞑想中に現れた女神にスメール山(Sumeru, 須弥山)で修行するように勧められたスタソーマは, 旅の途中の庵でケーシャワ尊者に会う. 尊者はスメール山まで王子に同行することになる.
- 3) 【スミトラ尊者】旅を続けるスタソーマは山中の庵でスミトラ尊者に出会う. スミトラ尊者はスタソーマの母方の大伯父である. スミトラ尊者はスタソーマに以下の物語を語り, スタソーマだけが世界を救えるかと訴えるが, 王子の求道の決意は揺るがない.

\*\*\*

### 【スミトラ尊者の物語】

カーシー国の王(スミトラおよびスタソーマのきょうだい)はブラフマー神の恩寵を得て息子ダシャバーフを授かる. 父王が死去したあと王位を継いだダシャバーフはハスティナ王と同盟を結び, 悪鬼たちの退治に力を注いでいる. また, 彼の妹(スタソーマの妹)チャンドラワティーはスタソーマの妻とな

るのにふさわしい女性である。一方、前生においてブッダによって調伏された悪鬼シュチローマは、ラトナカンダ国の王子として転生している。ルドラ神(シヴァ神の別称)に帰依した王子は悪鬼の本性がよみがえり、今ではプルシャーダ(人喰い)と呼ばれ、悪鬼の軍隊を率いて人々を襲うようになって世界中の人々から畏怖されている。これを退治できるのはブッダの転生であるスタソーマだけである。

\*\*\*

- 4) 【三匹のけだものとの出会い】スメール山頂へ向かうスタソーマの一行は深い森を通過する。森のなかでガジャワクトラ(象頭の化け物)が襲いかかるが、スタソーマの瞑想の力によって調伏される。さらに進むと大蛇が襲いかかるが、これもガジャワクトラとスタソーマによって調伏される。さらに進む一行は、空腹に苦しむ雌虎が自分の子を食おうとするところに出会う。スタソーマは子虎を解放し、雌虎に自分の体を与える。スタソーマの血を飲んだ雌虎が犯した罪に気づき後悔しているとインドラ神が現れ、スタソーマを生き返らせる。山頂についたスタソーマは弟子となった三匹にシワ派のヨーガ修行と仏教の不二(advaya)のヨーガの教えなどを説いたあと、一人となって山頂に行き瞑想に入る。
- 5) 【スタソーマの本性顕現】瞑想に専念するスタソーマの心を俗界に引き戻してプルシャーダの調伏に向かわせようと、インドラ神はティロータマを初めとする天女たちにスタソーマの誘惑を命じて送り込むが失敗する。そこでインドラ神自らが美しい女神に変身してスタソーマを誘惑しようとする。その瞬間、神々の意を察したスタソーマがワイローチャナの姿に変じると、その前にインドラ神他の神々や聖人たちが集まり、スタソーマにプルシャーダの調伏を祈願する。
- 6) 【ダシャバーフとの出会い】神々の願いを聞き入れたスタソーマは王子の姿にもどり、ケーシャワ尊者とともに飛行して山を降りる。偶然の機会からスタソーマはダシャバーフと出会う。ケーシャワ尊者の説明でいとこ同士と知ったダシャバーフは大いに喜び、スタソーマをカーシー国に招き、妹のチャンドラワティーを妻として与えることを申し出る。
- 7) 【カーシーへの旅】カーシー国への旅の途上、一行は廃墟となったアワンガ国を通過する。ダシャバーフはそれを見て事情を説明する。

\*\*\*

#### 【ダシャバーフの物語】

アワンガ国のデーワンタカ王とそのきょうだいであるマガダ国のコーシャ王がそれぞれダシャバーフの妹(チャンドラワティー)と近親の王女との結婚を申し出たとき、ダシャバーフが拒否したために、戦争がおこった。ダシャバーフに破れた二人の王は国を逃れてプルシャーダと同盟を結んで今にいたっている。

\*\*\*

- 8) 【チャンドラワティーとの結婚】カーシー国についてスタソーマはチャンドラワティーと盛大な婚礼の儀式をへて結婚する。初めはチャンドラワティーは結婚に不本意であったが、前生においてワイローチャナの妃ローチャナーであったことを自覚する。新婚の夜、二人は自分たちが前生においてワイローチャナとローチャナーであったことを想起する。
- 9) 【スタソーマの帰還と即位】スタソーマは妃とダシャバーフを伴ってハスティナ国へ帰還する。美しくロマンティックな旅の情景の描写。スタソーマは父王に代わって王位につき、ダシャバーフは守備隊長としてハスティナ国に留まる。
- 10) 【プルシャーダの百王捕獲】その頃、足の傷から重い病にかかっていたプルシャーダは、傷が回復すれば100人の王を犠牲に捧げようとカーラ神に誓いをたてる。首尾よく治癒すると、悪鬼の軍団を率いて99人まで王を捕獲する。シンハラ国のジャヤウィクラマ(実はウイシュヌ神の転生)が抵抗の

末に戦死したので生け捕ることができなかったが、計略によって 100 人めの王を捕らえるのに成功しカーラ神に捧げる。しかしカーラ神は捕獲された王たちに不満を示し、唯一無比の生け贄としてスタソーマを要求する。プルシャーダとその軍団はハスティナ国へ進軍を開始する。

- 11) 【プルシャーダのハスティナ攻撃】スタソーマは自らを犠牲に捧げることで戦闘を回避することを希望するが、ダシャバーフたちは抗戦の道を選び、戦闘が始まる。多くの死者を出す激戦の末、ルドラ神の姿に変身したプルシャーダがダシャバーフを倒し、一時は優勢だったハスティナ側の軍団は壊滅する。
- 12) 【スタソーマのプルシャーダ調伏】ついにスタソーマ自身が単身で戦場におもむきルドラ神と対面する。ルドラ神は世界を焼き尽くす劫火に変身してスタソーマを焼き殺そうとするが効果はない。その火が世界を破壊しそうなのを見て、神々が降下し、「ブッダとシワの本質は一つなり」(bhinneka tunngal ika)という主旨の文句を唱え、ルドラ神に世界を破壊しないよう懇願する。スタソーマが智拳印を結んで念じると、プルシャーダの体からルドラ神が去り、力を失ったプルシャーダは自身の非を悔いる。
- 13) 【スタソーマのカーラ神調伏と天界への帰還】スタソーマはプルシャーダに命じて自分をカーラ神の所へ連れて行かせ、捕獲された王たちを解放させた後、自らの体をカーラ神に捧げる。蛇に変身したカーラ神は彼を呑み込むが、逆に調伏されてしまう。仏門に入ったプルシャーダとカーラ神にスタソーマは教えを説く。戦死者たちはインドラ神の力によって生き返り、祝宴が開かれる。世界に平和と秩序が回復する。スタソーマと王妃が修行の結果、天界に帰還した後、息子アルダナがハスティナ国を治める。

#### 参考文献

- 青山亨 1986 「古ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容」『東南アジア研究』24 (1): 3-17.
- 1994 「ラーマ、ラーヴァナ、ハヌマーン—ポリフォニーとしての叙事詩とその英雄たち」『しにか』1 月号. 5 (1): 62-67.
- 1995 「アルジュナウィジャヤからスタソーマへ—歴史的な脈の中の二つの古ジャワ語文学作品」. 『東洋學報』77 卷 1-2 号. pp.01-033 (200-232).
- 1997a 「バリ島クルンクン旧王宮の天井画に描かれた『スタソーマ』物語: 図像テキストへのひとつのアプローチ」. 『東南アジア史の中の「中央」と「地方」』平成 6~8 年度文部省科学研究費補助金 (国際学術研究) 研究成果報告書. 吉川利治 (編). pp.134-152. (大阪外国語大学西日本地区東南アジア史研究会).
- 1997b 「古代ジャワ社会における自己と他者—文学テキストの世界観」『地域のイメージ』(地域の世界史第 2 卷) 辛島昇・高山博 (編). pp. 94-137. 東京: 山川出版社.
- 石井米雄・他編 1991 『インドネシアの事典』京都: 同朋舎. とくに「ジャワ文学」「スタソーマ」「タントゥラル」の項目.